



日本植物病理学会ニュース 第101号

(2023年2月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会開催報告

令和4年度日本植物病理学会北海道部会では、10月13日(木)に第227回談話会、14日(金)に一般講演が開催された。新型コロナウイルス蔓延防止のため、談話会、一般講演および総会がオンラインと北海道大学農学部多目的室を会場として利用するハイブリット開催となった。株式会社MONSの参加登録システムを利用して参加受付と参加費徴収を行い、67名(オンライン63名、多目的室4名)の申込みがあった。3年ぶりの談話会では、「近年の学位論文から学ぶ植物病理学」をテーマに5名の方々の講演が行われた。一般講演では20題の講演があり、内訳は菌類病12題、細菌病2題、ウイルス病6題であった。昨年と同様に、Webex meetingを利用したオンライン会議システムにより講演および総会が進められ、ホストPCの設置や予鈴・本鈴など進行にかかる事務局対応は、多目的室において実行幹事と学生アルバイトで行なわれた。特にトラブルはなく、座長による質疑応答などはスムーズに行われ概ね予定通りに進められた。オンライン会議に慣れて来たものと思われる。次年度の北海道部会は、令和5年10月12日(木)～13日(金)の2日間の日程で談話会と一般講演、総会が対面開催で実施され、懇親会でさらなる情報交換ができることを切に願う。(川上 顕)

(2) 東北部会開催報告

令和4年度の日本植物病理学会東北部会は、9月27日、28日の2日間にわたり、福島県福島市コラッセふくしまで開催され、一般38名、学生23名(合計61名)の参加があった。一般講演では糸状菌病7題、細菌病2題、ウイルス・ウイロイド病4題、植物保護6題の合計19題の発表が行われた。また、弘前大学名誉教授の佐野輝男氏から「ウイロイド研究-ホップ矮化ウイロイド」、岩手大学名誉教授の吉川信幸氏から「植物ウイルスベクターの開発と応

用」の特別講演が行われた。幹事会・総会では次年度部長に岩手大学農学部の磯貝雅道氏が選出された。本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、岩手県農業研究センター生産環境研究部の岩館康哉氏「東北地域の果菜類に発生する難防除病害の生態と防除に関する研究」に授与された。新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの対面開催となり、活発な情報交換がなされ、大いに親睦が深められた。令和5年度は青森県担当で開催が予定されている。

(山田真孝)

(3) 九州部会開催報告

令和4年度日本植物病理学会九州部会は、11月16日～17日に鹿児島大学郡元キャンパスにおいて対面形式により開催された。開催期間中に昨年度実施できなかった地域貢献賞受賞者講演、および一般講演を実施した。参加者数は52名、発表数22題と盛会であった。その内訳は当学会正会員37名、非会員6名、そして学生会員9名であった。令和3年度日本植物病理学会九州部会地域貢献賞受賞者講演は吉松英明氏が「麦類および園芸作物における新病害の同定と防除技術に関する研究」という業績で実施した。総会も期間中に対面形式で開催され、全ての議案が承認された。なお、令和5年度の次期開催地は長崎県で開催されることが決定した。一般講演では座長を交えて従来の形式による質疑応答を行い、コロナ禍以前と同様の活発な意見交換が実施できた。さらに九州部会幹事諸氏による厳正な審査のもと、8題の学生発表の中から1題を学生優秀発表賞に選出した。学生優秀発表賞は、九州大学農学部植物病理学研究室の日下部暖さんが「*Ralstonia pseudosolanacearum* ゲノム情報から予測されたレース4特異的なhrpG相同性遺伝子について」という演題で受賞された。

今回の九州部会は、当初から対面形式で準備を開始し、最終的に実現できたため事務局としては安堵の一言に尽きる。例年の情報交換会は残念ながら今年も取り止めとなったが、次年度はコロナ禍が収まり、長崎の地において参加

者が懇親を深められることを期待したい。今回の九州部会
は井上九州部会庶務幹事、鹿児島大学の岩井 久先生、中
村正幸先生、西 八束様をはじめとする鹿児島県関係者、
および九州沖縄農業研究センターの皆様のご尽力ならびに
ご協力によって、成功裏に実施できた。ここに記して、心
より御礼申し上げたい。(竹下 稔)

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第 30 回土壌伝染病談話会

第 30 回土壌伝染病談話会は、2022 年 11 月 11 日（金）
にオンライン（Zoom ウェビナー）で開催された。参加登
録者は 208 名（正会員 132 名、学生会員 15 名、非会員 61
名）で、当日の開催中は常時 160 名以上の視聴者があった。
前回（2020 年度）がコロナ禍で中止となり、今回は 4 年
振りの開催となったため、土壌病害における最近の話題を
集めた談話会を企画した。最初に、農研機構植物防疫研究
部門の吉田重信氏から、AI を活用した土壌病害診断技術
の開発について、プロジェクト概要と成果事例を紹介して
いただいた。最近の AI 技術の発展は目覚ましく、農業分
野への利活用については多くの関心を集めているようで、
多数の質問が寄せられた。次に、2018 年以降、沖縄県、
鹿児島県、宮崎県で発生が確認されて以来、全国に拡大し
ているサツマイモ基腐病について、発生生態を農研機構九
州沖縄農業研究センターの小林有紀氏に、また、その防除
法について、鹿児島県農業開発総合センターの西岡一也氏
に講演していただいた。幸いにも、防除法が確立された後
は発生状況が落ち着いてきているとのことであるが、今後
も地球温暖化と相まって、南方から新たな病害が本邦に侵
入してくる可能性は高く、本事例に見られるような迅速な
対応が求められることが予想された。休憩を挟んだ後、代
表的な土壌病害の最近の知見として、ジャガイモ疫病の特
性とその制御について北海道大学大学院の秋野聖之氏か
ら、続いて千葉県農林水産部の高橋真秀氏からは、化学農
薬を使用しないナシ白紋羽病に対する新たな防除法の開発
についてご講演いただいた。SDGs 時代に即した防除対策
であり、かつ、昨年度から農林水産省が取り組んでいる「み
どりの食料システム戦略」とも方向性が合致する内容で、
多くの質問が寄せられた。また、最後の総合討論では、講
演者の 5 人に司会役の実行委員長が加わり、計 6 人がウェ
ビナーの画面上で参加者からの質問を受けながら、それら
に関連するトピックについて意見交換を行った。質問は
次々と寄せられ、盛会のうちに本談話会を終了することが
できた。最後となったが、本談話会開催に当たり、講演者
の方々および多数の質問をお寄せいただいた参加者の皆様

に厚く御礼申し上げます。

(宍戸雅宏)

【学会活動予定】

1. 2023 年度大会ならびに研究会・談話会開催予定

(1) 日本植物病理学会大会

日時：2023 年 3 月 27～29 日

場所：オンライン開催（Zoom ウェビナー）

事務局：東京農業大学 厚木キャンパス

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

岡野夕香里氏（福島大学食農学類）ならびに橋本将典氏
（静岡大学学術院農学領域）の 2 名が、2022 年度（第 21 回）
日本農学進歩賞を受賞されました。日本農学進歩賞は、財
団法人農学会が農林水産業およびその関連産業の発展に資
する農学の進歩に顕著な貢献をした優秀な若手研究者を顕
彰する賞です。受賞の対象となった研究業績は、岡野氏の
「ウイルス感染時に働く植物免疫抑制因子とその作用機作
の解明」、橋本氏の「植物の広域ウイルス劣性抵抗性遺伝
子の発見とその発現機構の解明」です。授賞式および受賞
者による受賞講演会が、2022 年 11 月 25 日（金）に東京
大学農学部弥生講堂にて受賞者と関係者のみで開催され、
授賞式・講演会がオンライン配信されました。なお、今年
度の受賞者 10 名のうち 2 名を当学会より輩出できたこと
を会員全員で喜び合いたいと思います。(宮田伸一)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換すること
を趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご
紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会に
おける受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ
下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生，大里修一，宮田伸一，宮本拓也，藤川貴史

編集後記

明けましておめでとうございます。新年にあたり、会員
の皆様のご健勝と学会の益々の発展をお祈りいたします。
学会ニュース第 101 号をお届けします。寒い日が続きます
が、寒さの中にも少しずつ春の気配が感じられるように

なってきました。学会活動は新型コロナウイルスの感染状況からオンラインでの開催が多い中、北海道部会ではハイブリット開催、東北部会と九州部会は3年ぶりに対面形式で開催されたことは、誠に喜ばしいことでありました。準備を進めて頂いた開催事務局を始め関係者の皆様のご尽力

によるものと思います。ありがとうございました。昨秋、岡野夕香里氏ならびに橋本将典氏が日本農学進歩賞を受賞されました。今後益々のご活躍とご発展を祈念致します。

(門田育生)
